

THE KAGOSHIMA
UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter

NO.3

MARCH 2002



鹿児島市下福元切り通し

鹿児島市谷山から伊作峠に至る県道の改築工事現場で、今からおよそ8,000万年前の海成層^{しまんとるいそうぐん}「四万十累層群」とそれを覆うおよそ10万年前の阿多火砕流が現れた。

「四万十累層群」は、薩摩半島の川辺郡川辺町野間で小学生によって発見されたアンモナイトの化石から堆積年代が明らかになった。この鹿児島の基盤を成す「四万十累層群」は層相から深海に堆積したものであることが分かっている。長い地質時代のために岩石になり、隆起して陸上に姿を現わした。一方、「阿多火砕流」^{あたかさいりゅう}は鹿児島湾の湾口部に位置する阿多カルデラを形成させた大噴火によって噴出し、南九州に広く分布したものである。

この崖では火砕流自身の熱と圧密で硬い溶結凝灰岩になっている。風化した海成層「四万十累層群」は、火砕流の熱によって酸化し、赤く変色(酸化鉄)している。これら二つの地層の間には8,000万年に近い時間差があり、その間に起こった出来事は、風化侵食によって消し去られている。

鹿児島大学総合研究博物館の創設にあたって

鹿児島大学名誉教授 初島住彦

昨年11月26日に行われた鹿児島大学総合研究博物館の創設記念行事の際は、私が集めた植物標本に対し大学からの感謝状を頂き厚く御礼申し上げます。その際、御礼の言葉と新しい博物館の運営について希望を述べるつもりでしたが、式典スケジュール上、果たせませんでしたので、この紙面をかりて述べさせていただきます。

大学の博物館の運営については大学によって多少異なっているようであるが、鹿大博物館の場合、私は研究主体の博物館であってほしいと思う。

また、研究地域の問題であるが、南九州の大学として研究地域を南九州から南西諸島に重点をおいてもらいたい。奄美大島、徳之島は、生物学的に日本で最も重要な地域で、また最も興味ある地域と考える。

次に、博物館の施設で最も重要な点の一つは、博物館内又はそれに隣接した所に図書分館を設けることである。研究者にとって標本のすぐ近くで参考文献が見られることは極めて大切なことである。博物館から遠く離れた所の図書館まで往復するのは遠方から来た研究者には時間の浪費が大きい。

私がジャワのボゴール腊葉館にいた時は、腊葉館が図書館と廊下で連なっていたので極めて便利であった。またこの図書館では論文の別刷にも全部カードがあり、雑誌がなくても必要な論文が見られる便利があった。日本では博物

館に植物の漬浸標本（花や果実など）があまりないが、上記ジャワの腊葉館には約1万点の液浸標本があった。

また博物館では狭くても、外来研究者が宿泊できる場所を用意していただくと大変便利であると思う。若い研究者は研究費が少ないので大変助かるだろう。そのほか自由に使えるコピー機、コンピューターの設置も望ましい。



田中学長より初島先生へ感謝状授与

はつしま すみひこ 農学博士

1906 (明治39)年生まれ
鹿児島高等農林専門学校・九州大学農学部林学科卒業
九州大学農学部助教授・ボゴール植物園研究員を経て
1948 (昭和23)年 鹿児島農林専門学校 助教授
1950 (昭和25)年 鹿児島大学農学部 教授
1972 (昭和47)年 鹿児島大学農学部選官 名誉教授

鹿児島市下福元切り通しの保存

鹿児島県土木事務所は、鹿児島市下福元町において県道ののり面に露出した海成層「四万十累層群」とそれを不整合関係で覆う阿多火砕流を現地保存し、展示するという粋な計らいをした。

地層はコンクリートの枠(約9m×3m)で囲われ、崩落(剥落)を防ぐ為に表面は特殊な樹脂溶液が吹き付けられている。国の天然記念物などに指定された特殊な地層、化石、断層を除いて、一般の地層が現地保存された例を知らない。自分達が生活している足元の地層を知ることは、地球の歴史をひも解く楽しさだけでなく、防災を考える上で重要であり、このような現地保存が今後も行なわれることを期待する。

(大木公彦)

現地保存・展示された地層



大学博物館からフィールドミュージアムへ

大木公彦

近年、日本各地に博物館が開設され、国民の知的好奇心を満たす施設として注目されている。一方で、多くの博物館から、単独では多分野にわたる標本を収集・保管し、展示することに限界があり、博物館の在り方に苦慮しているという声が聞こえてくる。この打開策の一つとして、博物館や資料館が連携し、それぞれの施設をベースとして周辺に存在する自然や歴史的遺産を巡り、現地で本物と接することを試みてはどうだろうか。ある自然や遺跡を施設に展示できるサイズに切り取ってみたい、その背景を示すために写真やコンピューターグラフィックを駆使しても、その場所の3次元的空間を来館者に肌で感じさせることは難しい。縄文・弥生時代の遺物を展示することによって、その時代に生きていた人々の文化の一端に触れることはできるが、遺物が出土した場所に立ち、周囲の地形・地質、気象、植生などを観察し、当時の居住環境にまで思いを巡らすことによって彼らの文化の全容が分かるのではないだろうか。現地で考え、疑問に思ったことを再び博物館や資料館に持ちかえり、様々な学問分野の研究結果から答えを求める楽しさを人々に理解してもらうことが重要である。多くの識者が述べているように、博物館や教育機関は、知識を人々に与えるだけではなく、彼らが自らの力で思考するための手助けをするべきであろう。現地で博物館や資料館が連携し、学問分野の枠にとらわれないフィールドへの案内役として行動してこそ、国民の知的好奇心を満たすことができ、愛される施設になるのではあるまいか。

2001年度のおもな活動

- 4月 1日 鹿児島大学総合研究博物館創設
- 5月 1日 専任スタッフ 着任
- 5月14日 看板上掲式
- 8月 1日 日本第四紀学会2001年度大会共催
- 8月26日 自然体験ツアー
－甲突川流域の自然と生活－
- 10月13日 公開講座【大学博物館への誘い】
講演 高倉洋彰 西南学院大学教授
湯川淳一 九州大学総合研究博物館長
実習 博物館スタッフ等
- 10月29日 第1回特別展
【古代からのおくりもの－鹿大に眠る遺跡－】
- 11月22日 第2回生命科学学術講演会<後援>
菅波秀規 興和株式会社 臨床解析部統計解析課
- 11月26日 総合研究博物館創設記念式典
記念講演 佐原 真 前国立歴史民俗博物館長
瀬戸口 烈司 京都大学総合博物館長



自然体験ツアー



第1回特別展「古代からのおくりもの」

創設記念式 記念講演
前国立歴史民俗博物館長 佐原 真 氏

新任教官紹介 2002.03.01着任

落合雪野

Ochiai Yukino

(分析研究系・助教授) 専門は、民族植物学、有用植物分類学です。食べる、癒す、飾る、染めるなど、いろいろな目的で使われる有用植物をもとめて、東南アジア、韓国、日本でフィールドワークしてきました。有用植物は、地域の自然と文化がはぐくんできた「宝」です。鹿児島大学に集められた貴重な植物標本を通じて有用植物の多様性や人とのかかわりを明らかにするとともに、あらたな「宝」を見つける活動を行っていきたくと考えています。



兼務教官の紹介

森 脇 広	法文学部	(自然風景の変化に関する研究)	四 宮 明 彦	水産学部	(魚類の分類生態学の研究)
鈴木 達 郎	教育学部	(地質年代学)	鈴木 廣 志	水産学部	(大型十脚甲殻類の分類と生態)
松 井 智 彰	教育学部	(斜長石巨晶の鉱物学的研究)	中 村 直 子	法文学部	(南部九州の弥生・古墳時代の研究)
八 田 明 夫	教育学部	(理科教育、有孔虫の研究)	新 里 貴 之	法文学部	(琉球列島先史時代の考古学的研究)
富 田 克 利	理学部	(粘土鉱物の研究)	本 田 道 輝	法文学部	(九州と南西諸島の文化交流の研究)
井 村 隆 介	理学部	(活断層と活火山の活動史・災害研究)	新 田 栄 治	法文学部	(東南アジア考古学)
小 林 哲 夫	理学部	(火山地質、噴火現象、テフロクロノロジー)	渡 辺 芳 郎	法文学部	(薩摩焼の考古学的研究)
櫻 井 仁 人	工学部	(黒潮流軸変動)	青 山 亨	多島園研	(東南アジアの歴史的文献及び映像資料の電子化とデータベース化)
久 保 田 康 裕	教育学部	(植物群集の動態と多様性の維持機構)	原 口 泉	法文学部	(薩摩藩の博物学)
宮 本 旬 子	理学部	(陸上植物の多様性の開放)	土 田 充 義	工学部	(アジアの民家)
相 場 慎 一 郎	理学部	(多雨林の樹木種多様性)	晴 永 知 之	工学部	(中国、韓国の民家と集住形態研究)
一 谷 勝 之	農学部	(作物の遺伝的多様性)	藤 枝 繁	水産学部	(鹿児島県海岸漂着物に関する研究)
野 田 伸 一	多島園研	(医学的昆虫・ダニ類の分布)	穴 澤 活 郎	理学部	(非人為作用による水質形成機構研究)
河 合 深	多島園研	(南西諸島海産無脊椎動物の種分化)	有 馬 一 成	理学部	(タンパク質分解酵素アイソザイムの分子進化)
塚 原 潤 三	理学部	(海産無脊椎動物の生殖と発生)	坂 元 隼 雄	理学部	(環境試料中の微量元素含有量と分布)
山 根 正 気	理学部	(東南アジア産剣膜翅類の分類と生物地理)	富 安 卓 滋	理学部	(環境中における水銀の挙動)
富 山 清 升	理学部	(軟体動物貝類)	大 西 佳 子	歯学部	(歯学関係の展示研究、サイエンス・コミュニケーション)
中 西 良 孝	農学部	(在来家畜および野生化動物の保護と活用に関する研究)	八 木 史 郎	農学部	(植物・菌類のレクチンタンパク質の分布)
小 澤 貴 和	水産学部	(魚類仔稚魚の研究、サイウオ科魚類の分類学的研究)			

●博物館行事予定

■ 5月17日(金)

研究交流会「氷河期以降の始良カルデラ」

講 師／下山正一氏(九州大学大学院理学研究院)
森脇 広氏(鹿児島大学法文学部)

ところ／郡元キャンパス総合教育研究棟202号
と き／17:00~19:00(終了後、懇親会)

■ 6月22日(土)

公開講座「大学博物館への誘い」

と き／10:00~16:00【無料】
ところ／郡元キャンパス総合教育研究棟201号
内 容／大学博物館の学術標本の処理法や保管の方法、貴重な標本、資料の紹介。

■ 7月20日(土)

市民講座「海の話」

内 容／「黒潮の話」櫻井仁人氏(工学部)、
「鹿児島湾の環境」大木公彦氏

■ 7月27日(土)

公開講座「自然体験ツアー なぎさの自然」

案内者／塚原潤三氏(理学部)、佐藤正典氏(理学部)、西隆一郎氏(工学部)

■ 10月24日(木)~11月26日(火)

特別展「地球からのめぐみ一金」

■ 11月16日(土)

市民講座「地球からのめぐみ一金」

講 師／浦島幸世 鹿児島大学名誉教授

■ 12月13日(金)

研究交流会

と き／17:00~19:00(終了後、懇親会)
ところ／博物館会議室 ※文系を予定

■発行／2002年4月30日

■編集・発行／鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065鹿児島市郡元1-21-30 TEL/FAX: 099-285-8141